

中・近世における大山区の神社と祭礼について 広域祭祀の背景 久下隆史

Shrines and Festivals in the Oyama District in the Middle Ages and the Early Modern Times: Historical Background to Regional Festivals

はじめに

- ① 大山区の概要
- ② 中世大山荘の神社と祭祀
- ③ 近世一宮の祭礼と六所大明神
おわりに

【論文要旨】

丹波国大山荘は兵庫県篠山市の西北部に位置する東寺領の荘園である。大山荘に関しては、戦前・戦後を通じて多数の論考が発表されているが、荘内の寺社や荘民の神社信仰を対象としたものは少ない。

本論では、中世の荘内の神社信仰が鎌倉、室町期の中でどのように変化していくか、その中世の神社信仰がどのように再編されて近世に移行するかを明らかにしたものである。

鎌倉期の大山荘の神社は、一宮、二宮が荘内に祀られ、九月九日の祭礼には流鏑馬が行われていた。また、荘内には六所大明神が祭られ、一・二宮を中心に荘内の神社の秩序化が図られていたのである。

こうした、鎌倉期の荘内の神社信仰に対し、室町期に入ると下地中分で東寺領となった一井谷の八幡宮、若宮、西田井の稲荷社が新たに資料として加わることになる。このような、室町期の荘民の信仰対象となった神社は、荘内の農民達の起請文によ

くあらわれている。その中で特に注目されるのが、六所大明神と新たに登場する三社明神である。この三社明神は、一宮のことである。室町期には一宮を八幡神社と理解し、本地仏を阿弥陀如来としていた。三社は阿弥陀三尊を表す神社側からの呼称であった。

三社明神とならんで、起請文に記載された六所大明神は、荘内の村を背景にして祭られていた神社であった。

こうした、一宮を中心とする六所大明神の神社配置と祭礼は、近世に入ると村落の氏神の神輿が一宮に結集するという祭祀形態に継承されていく。

さらに、近世の氏子の間に台頭する有力百姓層は、神田講を別に組織し、祭礼に当たっては境内に独自の職を立てる権限を持つようになる。

このように、近世の一宮の祭礼は中世の祭礼を継承しながら、新たな広域祭祀圏を形成することになるのである。